

吉田茂美（無所属）

ラカンはフロイトの発見を構造言語学によって基礎づけたと言われる。ラカンにとって主体とは何よりもシニフィアンの効果のことであり、「一つのシニフィアンが別のシニフィアンに対して主体を代表象する」と表現される。しかし主体はけっして構造言語学の枠組みに還元し尽されることはなく、その根拠を物自体のレベル、ラカンのいう「現実界」にしていることは、特に後期のラカンによって強調されるところである。

人は他者から与えられる原初的なシニフィアンに同一化することによって、一人の主体として生成する。その際、主体はその構造の安定化のために、存在論的地平から疎外されることを運命づけられている。主体は言語の世界、ラカンのいう「象徴界」に参入するにあたって、存在論的地平から疎外されるというこの試練を人生のかなり早い段階において課せられるが、これが「原抑圧」と呼ばれるものである。そしてこの「原抑圧」に墮くと、後年（多くは思春期などの若いうちに）主体にとっての危機的な状況に直面した際、統合失調症を発症するリスクを背負うことになる。

統合失調症においては妄想や幻覚などの症状が現れるが、これらの症状は、原抑圧において首尾よく抑圧されることのなかった原初的なシニフィアンの代替物として形成されることが出来る。なかでも「言語新作」は、主体が言語世界において自身を如何に位置づけるかという課題をめぐって生じることがあるが、それは同時に自己言及の矛盾をいかに解消するかという課題としても顕在化する。通常、主体はこれらの課題を「一元特徴」（フロイトのいう *einzigiger Zug*, ラカンの言う *trait unaire*）と呼ばれるシニフィアンを機能させることによって乗り越える。しかし原抑圧がなされていなければこの一元特徴が機能せず、メタ言語によって自己規定せざるを得ない。これが統合失調症に見られる陽性症状である。

メタ言語による自己規定の試みは、ウィトゲンシュタインが『論理哲学論考』において批判した、ラッセルのタイプ理論にも通ずるものである。ラッセルのタイプ理論は自己言及のパラドックスを解消するためにメタ言語を要請するが、そういった企ては、原抑圧に問題を抱える主体が、原抑圧の際に抑圧されることのなかった原初のシニフィアンの替わりに言語新作などの妄想をメタ言語として形成する、統合失調症にみられる症状にも重なるからだ。

ウィトゲンシュタインのメタ言語批判は、世界に主体は存在しないとする「独我論」を結論付けるものだったが、メタ言語の拒否は必ずしも独我論を帰結しはしない。フロイト＝ラカンのいう一元特徴はメタ言語を要請することなく、世界の中に主体を位置づけるからである。本発表ではウィトゲンシュタインを独我論に導いたメタ言語批判と、フロイト＝ラカンの一元特徴に見られる立場を比較しつつ、両者の依って立つ「存在論的視点」について検討を進めてゆく。

牛尾憲治（一般社団法人泉鳳）

本発表は、死を認識論の生成的中心構造に位置づけることで、近代哲学以降の生に基礎づけられた認識論を根本的に転回し、「存在論的死学」の構想を提示する。

デカルト以降、近代哲学の認識論は、生きた主体の理性を認識の出発点とし、主体の内在的枠組みにおいて成立する営為として構成されてきた。この構造において、死は単なる生物学的事実や自然的終焉として認識論から排除され、認識は生の内在的領域においてのみ成立する営為とされた。

その結果、認識論は「如何にして知るのか」には応答しても、哲学の営為の本質である「問い」すなわち、「なぜ問いが立ち上がるのか」という始源的契機を視野から消失させ、理性は死を構造的に除外する形で生の自己充足的な形式へと完結させられてきた。こうした哲学史の前提を批判的に捉え直し、本発表では、人間存在が「死すべき存在」であるという根本事実から出発し、死が人間の知を駆動させる始源的基盤であることを明示する。

この視座において、人間は死によって時間、意味、倫理、物語、世界把握などの認識、生の構造を与えられ、これらは「死すべき存在」の条件のもとでのみ成立する。あらゆる知の形態は死を前提とし、知は死によって駆動される営為である。この視座は、哲学史における生や主体に理性の起源を求める認識論に対し、「死すべき存在の哲学」への根本的転回を促すものである。

この転回を本発表では「存在論的死学」と呼び、その中核概念として「スネトゲネシス（死すべき性質が生む構造）」を導入する。この造語はギリシア語の「スネトス（死すべき）」と「ゲネシス（生成）」の結合であり、有限性こそが知を駆動し、生を構造化する原理であることを示す。

本発表では、存在論的死学の視座から、知的営為がいかに死すべき存在であることを始源的条件として規定されているかを理論的に検討し、知が死の不可避性への根源的応答として生成することを明らかにする。死を認識論の構造的基盤とすることで、認識論の基礎づけの位置を内在性（生）から外在性（スネトゲネシス）へと転回する。それは、単なる定位の転回ではなく、スネトゲネシスとして外在性を、生の主体の外部にある対象としてではなく、むしろ内在的な生の構造そのものを駆動させ、根底から生成させる基盤として捉えることで、人間の存在論は内在の生から外在の死へという二元論を克服し、内在的死性によって駆動され、死によって終焉する生成論的構造へと刷新される。

この視座は、近代的形式主義を超え、現代における科学的知、社会的制度、倫理の基盤的理解に新たな地平を開く「死すべき存在」の哲学である。

中良太（大阪大学）

本発表では、アリストテレスの『詩学』における「統一性」の概念を捉え直し、現代において芸術とは何かという問いに対し、一つの応答を試みる。アリストテレスの「統一性」の概念は、再現芸術の要件について述べたものであるが、人々が作品を鑑賞する際に知覚、認識しようとする対象を述べたものであると捉え直すことができる。また、芸術とは何かという問いへの応答に芸術の歴史的機能主義という立場がある。歴史的機能主義は、芸術の形式や機能は時代を通じて変化してきたとみなし、その時代に形成されている芸術の形式や機能に適合しているかどうか、芸術であるかどうかの判断基準であるとみなす。芸術の歴史的機能主義を基盤とし、アリストテレスの「統一性」の概念を鑑賞の必要条件として組み合わせることで、芸術という変化を伴う感性的営みの核となる一側面を捉えられる。それはつまり、芸術とは、制作者によって制作された作品を鑑賞者が鑑賞し、そして、鑑賞者が芸術として鑑賞する際に主に注意を向ける力点は時代によって推移し、かつ現代以降も未知の力点へと推移しながら続いていく営みだという捉え方である。

アリストテレスは、『詩学』において、叙事詩や悲劇を題材に模倣の技術について述べ、鑑賞者の心に訴えかけるには作品に統一性が必要であり、それは統一性をもった対象を描くことで可能となると述べた。また、叙事詩と歴史記述を対比させながら、芸術として詩が鑑賞者の心に訴えかけるには、筋の組み立てが必然性をもって繋がり、かつ意外性をもってあるテーマの新たな側面を示すことが必要だと語った。ダントーが示したように、芸術の歴史が古くは再現と模倣、19世紀には表現、そして20世紀にはポップアートをはじめとして「作品とは何か」を力点として推移してきたとみなすならば、アリストテレスの「統一性」の概念は再現・模倣の芸術に絞って述べられたものである。しかし、その論点を鑑賞者が作品に向き合い芸術として何を捉えるかについての認識論であるとみなすならば、再現と模倣の時代にとどまらず、以降の時代にも通底する鑑賞の必要条件を示している。ダントーは、20世紀以降の芸術のアヴァンギャルド運動において、作品とは何かを問い直す作品が多く生まれたことから、芸術は20世紀以前のある種まっすぐに前進する進み方と20世紀以降の多元的に広がる進み方に分かれていると語った。しかし、本発表で示す芸術観は、「作品とは何か」という20世紀の芸術の力点も、再現・模倣や表現と同じく、多様な力点のうちの一つに過ぎないとみなす。そして、未来の芸術も、現代では予見できないような新たな芸術の力点が据えられる形で、時代を経ながら芸術の形式や機能が推移していくとみなす。時代を経ながら豊かに変化していく感性的営みとしての芸術について、それを貫く核として、アリストテレスの「統一性」の概念を捉え直すことが本発表の目的である。

山田雄介（京都大学）

アリストテレスにおける「自発性」概念の主要な典拠として、『ニコマコス倫理学』（*EN*）第3巻1章～5章および『エウデモス倫理学』（*EE*）第2巻6章～11章が広く知られている。これらの箇所における自発性の議論が、徳や悪徳およびそれらに基づく行為に対して与えられる、称賛・非難・赦しといった倫理的実践の成立条件を何らかの形で説明していることについては、学者の間で概ね一致した理解がある。

しかし、自発性の定義やその外延について、*EN*と*EE*の間には微妙な説明の差異が認められ、アリストテレスの思想発展の可能性をも踏まえた多様な解釈が提出されてきた。さらに、その話題の関連性から、後世の道德・倫理理論、とりわけ道德的責任（moral responsibility）論との関係をめぐる議論も活発である。粗雑な概観が許されるならば、アリストテレスの議論に道德的責任論の要素を読み取る解釈（Irwin 1980, Meyer 1993）、それに対抗して因果的責任論として読む立場（Roberts 1989, Cooper 2014）、あるいは、*EE*ではカント的な道德的責任論に接近する一方で、*EN*ではより包括的な自発性概念が展開されているとする見解（Charles 2012）などがある。さらには、両著作の間に基本的な一致を認めつつ、自発性の因果的説明の中に称賛や非難の実践を基礎づける規範的特徴を見出す解釈（Müller 2015）も示されており、議論は錯綜している。

本発表では、上記主要テキストの読解を通じて、従来の諸解釈を批判的に検討しつつ、各著作における自発性概念の内実を明らかにするとともに、それがどのように倫理的評価と結びつくのかを精査する。その際、*EN*と*EE*の性格の相違、ならびにアリストテレスの自然学的著作における関連する議論、とりわけ『動物運動論』などに見られる自発性の扱いに注意を払う。たとえばCharles（ibid.）が指摘するように、*EE*では*EN*よりも理論哲学的な用語が多用されており、両著作における議論の性質の差異は無視しえない。したがって、両著作における自発性概念の取り扱いに違いが見られる理由を解明するには、それぞれの文脈、議論の目的、用いられる概念装置について慎重な分析が不可欠である。また、近年の研究（Morel 2020）によって、倫理学的著作と自然学的著作における自発性概念の連関が一層明確にされつつある点も、本発表では積極的に考慮する。これらの検討を通じて、*EN*と*EE*の記述の不整合の原因を突き止め、アリストテレスにおける自発性概念の統一的学説の有無を明らかにすることを最終的な課題とする。

「歴史の哲学は可能か」という問いにいかに向き合うか？

——ディルタイ-ヨルク書簡集を導きとして——

入江祐加（岡山理科大学）

19世紀の哲学者ディルタイとその友人ヨルク伯は、どちらも生や歴史に対して共通した考え方をもち、互いに親密な交流を重ねた。ディルタイは、精神科学の構築において徹底的に生内在的な方法を採用し、特に歴史を理解する上では「理解」や「表現」という概念を重視し、追体験や解釈を通じて歴史的現象を理解しようとした。一方、ヨルク伯は、ハイデガーにも影響を与えた思想家であり、ディルタイと深い議論を交わし、時にディルタイを批判した。彼らの間で交わされた議論は「往復書簡集」として後世に残されている。

本発表で着目するのは、ディルタイとヨルクの往復書簡集のうちでの「生」、「歴史」、「学」といった概念に関する理解のずれである。これらのずれは最終的にはディルタイとヨルクとのあいだで目指すべき「哲学」の考え方のずれにもつながっている。確かなことは、ディルタイは、ヨルクとの対話をもとに自身の哲学のあるべき姿を明確化していったのであり、そのずれを議論しあうことは、ディルタイの精神科学の構築に対する立場確立の経緯を議論するうえで非常に有益であるということである。

本発表が往復書簡で特に着目するのは、「歴史の哲学は可能か？」という問いをなぜヨルクはディルタイに向けたのかという問いである。さらに、その問いに対する態度をディルタイ哲学の側から明らかにすることである。「生」や「歴史」に関して価値観や考え方は共通していたものの、ディルタイとヨルクのあいだではこれらの強度にある程度の考え方の違いが見えていたのであり、ヨルクが往復書簡のなかで「歴史の哲学は可能か？」という問いをあえてディルタイに向ける経緯を追っていくことで、ディルタイが精神科学の構築において決して譲らなかったものを見ることができるようではないか。一般に「生」と「学」との複雑な関係性を論述することに成功したことで、ディルタイの思想は後年、現象学や解釈学に影響を与えたといえる。書簡を通じて、ディルタイのこれらの考え方がどのように形成されたかを知ること、ディルタイが精神科学の構築において目指した「客観性」の内実およびそこに至るまでの過程を今まで以上に具体化することができるであろう。

西田幾多郎(1870-1945)の哲学において「個物」とは最も重要な概念の一つである。まずそれは中期の『働くものから見るものへ』(1927)において、無限の述語によってしても到達することのできない経験の個別性・唯一性を指すものとして、「主語となって述語とならないもの」という定義を得ることになる。そして後期の『無の自覚的限定』(1930)以降では、「個物」は個人的自己として「何処までも自己自身を限定する」という積極的な働きが強調され、それを逆限定する「一般者」との関係が「弁証法的世界」として確立されることになる。

このように西田哲学において「個物」の概念は、主に中期から後期の始まりにかけて練り上げられてきた概念であるが、『哲学論文集 第三』(1939)に収められた「歴史的世界に於ての個物の立場」(1938)という論文の中で新たな展開を見せることになる。それは「個物が個物的となればなる程...」という言葉を通して、「個物」概念の中に程度性が導入されたことである。西田哲学における「個物」概念に関する従来の理解を考慮する際、我々はここで「個物」に程度性が持ち込まれたことに注目せざるを得ない。「個物」とは他に比することの出来ない絶対の個別性を含意していたのではなかったのか。「個物的」ではない「個物」が果たして存在するのだろうか。

本発表では以上の問題意識を背景として、後期西田哲学において「個物が個物的となる」という言葉が持つ意味を明らかにすることを試みる。そのために手がかりとするのは、当該の論文をきっかけに西田が積極的に受容するようになったライプニッツの認識論である。西田は「個物が個物的となればなる程、我々の行為は真に世界を見るところから起る」という形で、「個物」の個体化の進行に、「真に世界を見る」という認識の問題を関係させながら論じている。そしてその認識のあり方に深く関与しているのが、西田がライプニッツから受容した「知覚」(perception)と「統覚」(apperception)との区別である。西田は「個物」における認識の発展を、ライプニッツがモナドにおいて示した「知覚」から「統覚」への移行行きに重ね合わせている。本発表では後期西田哲学におけるライプニッツ受容を認識論の側面から再検討し、それとの関係の中で「個物が個物的となる」という事態が如何にして成立するのかを明らかにする。以上の作業を通じて、西田哲学における「個物」概念を、「個体化」という観点から新たに照らし出すことができるだろう。

田島淳之介（関西学院大学）

本研究は、和辻哲郎が主著『倫理学』の中で提示した「人倫的組織」が果たす役割と意義について、彼がその構成契機として挙げた「家族」「親族」という血縁関係の知見から解釈するものである。

『倫理学』の前半部（序論、第一章、第二章）では人間存在の根本構造とその空間的・時間的構造について論じられている。まず倫理問題の場所は孤立的個人の意識ではなく、「人と人との間柄」にあると定め、人間存在を「個人的契機」と「全体的契機」（社会）とに分けて考察するところから始まるところは有名である。そこでは個人が共同性の否定において、社会が個別性の否定においてあるとしている。さらに、人間存在の個人的契機をあらわす概念として「私的存在」が挙げられる。私的存在は「物事のあらわになる場所においてあらわになっていない存在、すなわち公共性の欠如態」（第二章）であると規定されている。そしてその「私的」とは他の参与を欲せず許さないがゆえの「私的」であり、私的存在は「共同存在の一つの様態」であるとも述べている（第三章）。そして彼は私的存在と共同存在を踏まえ、第三章にて「共同存在の実現段階」として私的存在と共同存在の関係について論じる。

和辻の第三章「人倫的組織」の論述であるが、それは「家族」「親族」「地縁共同体」「経済的組織」「文化共同体」そして「国家」の順になされる。それぞれの共同体は共同存在の実現段階として各段階に分類されたものである。そしてそれらの分類は「血縁関係」「土地の共同」「文化の共同」「精神の共同」といった、おのおの共同体が発生する地盤によっている。

そこで我々は、第三章「人倫的組織」にて論じられる各共同体のうち「家族」および「親族」の項に焦点を当て、公共的であり私的である人間存在の本質について分析することを試みる。それは、彼の共同体（共同存在）論の中でも「家族」は「二人共同体」（男女）「三人共同体」（親子）というように必然的に第三者の関与を許さない、言い換えれば互いに特別な間柄であり他者では替えが効かないという人倫的組織の原初的な部分を突く第一の契機と言えるからである。そして「親族」は家族の「家」という範囲を超えつつも「人生の大事に関して存在を共同にする」という共同存在の重要な契機にあたる。ところで「人倫的組織」は信頼や真実といった「人間の道」が行為（実践）されるべき場であった（序論参照）。本研究の根本は、「人間の道」が実践される場としての家族、親族の意味づけである。

山本楓真（神戸大学）

本発表は、マックス・ホルクハイマー(Max Horkheimer, 1895-1973)が1930年代の諸論考で展開した「構成Konstruktion」概念と「叙述Darstellung」概念を手がかりに、彼の認識論の内実の一端を解明することを目指すものである。主たる分析対象となるホルクハイマーの論考は、「形而上学への最新の攻撃」(1937, 以下では「「攻撃」論考」と略記)であり、その中でも、とりわけ彼によるL・ウィトゲンシュタインやR・カルナップら論理実証主義に対する批判に着目する。

よく知られているように、ホルクハイマーは論考「伝統的理論と批判理論」(1937)において、社会を批判的に照射し、そのうえで主体による社会変革を目指す「批判理論」を定式化した。そして、この理論を経てTh・W・アドルノとの共著『啓蒙の弁証法』(1944/47)が執筆されるに至るのだが、その過程でホルクハイマーが論理実証主義の認識論を批判し、そこから彼独自の認識論を定式化させていたことはあまり知られていない。しかし、彼の認識論は、「批判理論」における社会批判を整合的に解釈するうえで重要な契機を担っている。これを示すことが本発表の最終目標となる。

「攻撃」論考でホルクハイマーは、主としてウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』(1921)とカルナップ『言語の論理的統語論』(1934)を取り上げ、彼らの認識論を批判する。ホルクハイマーによれば、論理実証主義における認識というのは、記号論理学に基づいた数学的言語を媒介とした経験であり、それゆえ認識対象に本来的に存する矛盾や内的外的変化の相は看過されている。そして、この認識論で取りこぼされた矛盾や変化を概念把握するべくホルクハイマーは、「構成」と「叙述」を介した認識論を展開する。「構成」とは、言語に備わる歴史性を表現するものであり、それゆえ言語を介した認識がどのような現実を主体に反映しているのかを明らかにするものである。ホルクハイマーによれば、論理実証主義の言語が認識主体に反映しているのは疎外された現実であり、この認識は批判されねばならない。また「叙述」とは、対象を繰り返し「解釈Bedeuten」することであり、対象の認識は一度きりでは終わらず、そのつど何度も解釈する反復作業となる。そのため、ホルクハイマーの認識論は、対象に一義的な意味を与えることで満足する論理実証主義の認識論とは異なるものとなる。

本発表では、「攻撃」論考で論じられる論理実証主義の認識論の内実と、ホルクハイマーの批判を明らかにする。そして、彼らの認識論に抗して定式化された「構成」と「叙述」の内実を示し、ホルクハイマーの認識論の射程が論理実証主義の言語概念にあることを確認する。最後に、「攻撃」論考と論考「伝統的理論と批判理論」の議論を比較することで、「批判理論」の社会批判を整合的に解釈するさいに彼の認識論が有効であることを示す。



石長佑一（大阪大学）

本発表の目的は、ジルベール・シモンドン（1924–1989）のイメージ（image）概念について、その特徴を明らかにすることにある。

フランス哲学においてイメージは特権的なトピックの一つであった。アンリ・ベルクソンは『物質と記憶』（1896年）にてイマージュを基礎的な概念として論じている。そのほか、ジャン＝ポール・サルトルは『想像力』（1936年）や『イマジネール』（1940年）にてイメージに関する現象学的な分析を行なっている。あるいは、科学認識論において広範な影響を与えたガストン・バシュラールの想像力論もまた、物質と関わるイメージないし物質的想像力を問題としている。フランス哲学では、イマージュ概念が哲学者の思考を触発してきたことは間違いない。そして、シモンドンの議論もこれらの哲学者を念頭にしていたことも疑いえない事実である。では、こうした時代状況の中でシモンドンのイメージ論はどのように位置づけられるべきなのだろうか。

本発表では、情報論の観点から検討することでシモンドンのイメージ概念の特徴について明らかにすることを試みる。周知の通り、シモンドン哲学において情報（information）概念は、独自の存在論を構築する上で重要な役割を果たしている。キャリアの早い時期からいち早くサイバネティクスや情報理論に対する高い関心を抱いており、人間諸科学（特に、心理学と社会学）に対する応用を自らの課題として掲げていた。情報をめぐる科学的知識に関心を抱く中で、シモンドンが注目するのは情報が主体にとって新たな意味作用をもたらす点である。つまり、情報は新たな行為を導く上で特権的な役割を果たしているということだ。

そこで注目に値するのは、イメージについて論じるパリ大学での講義『想像力と発明』（1965–66年）である。というのも、本講義録でシモンドンは行為の観点からイマージュの発生を論じる。その結果、イマージュは一種の有機体のように自律的に発展し、自立性を備えるという主張が示されることとなる。

本発表は、このイメージ論に対してシモンドンの独自の情報論の観点から考察を行う。以上より、単なる有機体論に止まらない広い射程を持つことを明らかにする。まず、シモンドンにおける情報論の枠組みを整理することで、その独自性を明らかにする。次に、シモンドンのイマージュ論において「先取り（anticipation）」が重要であり、有機体に意味作用をもたらす特権的な行為であることを示す。最後に、本講義録で論じられているイメージ概念が情報概念と重なることを考察する。以上より、シモンドンのイメージ論に情報の観点から解釈を与え、20世紀のフランス哲学におけるイメージ論の展開として位置付けることを試みる。

松田毅（岡山大学）

ラテン語“afficio”の完了分詞、“affectus”は、作用を受けたものが一定の状態にあることを意味する。これは情動・感情——「情念」と総称する——にも妥当する。実体や実体に準じるものが作用を受けると把握すれば、「アフェクトス」の論理・存在論が生じるが、焦点が情念の心理・倫理にあることは言うまでもない。この枠組みは、実体を容認しない、現代の「アフェクト論」にも影響を及ぼしている。

『情念論』のデカルトと『エチカ』のスピノザに続く、ライプニッツも、アフェクトスの二つの問題系の交錯地帯を探索し、情念に関する思索の跡を残した。それは、Schepers, H., *Lebniz Wege zu seiner reifen Metaphysik*. 2014. 170ffの提起を契機に、1679年4月20・22日の手稿*De Affectibus. Ubi de Potentia* (A.VI.4.Nr.269, Grua. 512-537) に関して「実体形相の復権」や「個体的実体」の概念形成に至る発展の一齣として解釈されてきた。

手稿は『情念論』の欲望とは独立の理性的情念を焦点にして始まる。ライプニッツは、「アフェクトス」を「善いものと悪いものに関する、心の思想から生じ、心を占拠するもの」と定義し、「心の占拠」を「あるものを考えるためになにかあるものに向かう傾向」と敷衍、「傾向」が活動する力であると続ける。だが、それを『エチカ』の隷属——その原因の認識を通した療法と能動感情喚起により可能な限り克服すべき状態——ではなく、追跡すべき「より完全な思考の系列」に心に向かわせる決定として定義する。アフェクトス論は「系列」の論理・存在論の地平に転位する。その結果、決定は、自然的には、諸系列を先後関係として含む「なにかが妨げないならば、そこからなにかが帰結する状態」、論理的には、主語と述語、含意するものと含意されるものの関係、存在論的には、実体と属性・変状*affectio*の関係として解明される。アフェクトスを、単なる受動でなく、能動（ある力の活動）として把握するのである。

手稿を導く、系列の観点から「ライプニッツの情念論」を特徴づける。まず『人間知性新論』2巻21章の「不安*inquiétude*」に即して、決定と欲求に導かれる情念が理性的であること。第二に、愛情、評判、賞賛、敬意、気前よさを『定義集』（C.492ff）が、基本的情念に数えるように、幾つかの社会的情念が根源的なこと。第三に、デカルトとスピノザでは基本的情念である、喜び、悲しみも複雑でありうることである。石黒ひで『ライプニッツの哲学』は、英国経験論が「単純」とする「xは赤い」のような感覚性質を、ライプニッツが「複雑」と言う理由を、言語哲学的に分析したが、系列の観点は感覚性質の範例と分析手法を超えて、情念の関係的存在論を可能にする。解釈の鍵は、手稿が明言する、アフェクトスが、思考の系列の探究を動機づける「表象」を含む点にある。

ライプニッツの情念論から情念を個人の生理と心理に還元する立場の限界とその理由を示し、倫理的帰結も引き出したい。